

非踏千里獨步 上

中村俊定文庫

文庫 18

716

1

3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80

虬戸菴素綾撰



俳諧 千里獨步

全部 二冊

東都書林 青黎閣藏

序



世亦能名之論さる詠多し
芭蕉翁の心を先生に傳へり
第一目準繩を巻く一巻
此中余物心は多しなりとす
を名する人ししあふに
寤何らしむ世名の乾坤
残り拈する

一歩も怪しむあらうし仍都鄙志好字
弘明大光の里獨歩を題し櫻木の彫
りしや古婦星運臺に與へ給ふ紙
本

寛政十二庚申仲呂

虬戸蒼

素綾



千里獨歩序

一歩も怪しむあらうし仍都鄙志好字
弘明大光の里獨歩を題し櫻木の彫
りしや古婦星運臺に與へ給ふ紙
本

此庵乃扉と星運事一系の
淡々不机と小冊とを又凡句の
地気荒々漢千里と獨歩と
是々々此一冊と

多味

南公

俳諧千里獨歩目錄

及翁句案方此

證句

脇乃仕方此

證句

四句目乃

六句目此

八句目乃

及翁句才三句自此

證句

才三句此

證句

五句目乃

七句目此

表八句此

證句

附句案方のる

変化乃る

卷面模様れる

月の一字隠えのる

軍伴句化れる

乞食の句化のる

地震の句化れる

趣向を言ふのる

轉一方れる

月花の句れる

戀れ句のる

盗人の句化れる

津浪の句化れる

雷の句化れる

句化非正れる

奉納の句仕立のる

新宅娶の句化のる

追善の句れる

二字切れる

三行切れる

を迫るる

物の本性れる

祈禱能借れる

夢窓の式れる

五韻相通れる

三字切れる

大迫れる

哉の次才れる

三世ふらぬる

三葉ふらぬる

十九ふらぬる

十八ふらぬる

十六ふらぬる

十五ふらぬる

尺申ふらぬる

短句こそふらぬる

短句はふらぬる

短句めふらぬる

比ふらぬる

何ふらぬる

五世ふらぬる

重言ふらぬる

花は揺れぬる

揺れ花ぬる

花は芳ゆれぬる

芳野は花ぬる

月華結ぬる

漢和、漢ぬる

子句十百節ぬる

賦物取やぬる

去ぬるとはなぬる

執筆仕方ぬる

目錄終

俳諧子里稻荷卷上

素綾著述

奈句案方

奈句ハ無極也

大極也

趣向也

としふ意ハ案方ハかゝるに極りあるまじけれあれ句の成
就すまじ大極ハ極り成就して極るハ趣向の見
出—ふ阿ま

一物生してまゝのまゝに立たのち一時の南無を合為
魂之世魂を合々切字回字成跡あり二つあるは是れ
一首の形ありてまゝも立全二つあるふあは此形あり

理者

糸切きくし雲のりたる
是のくし雲のりたる
是のくし雲のりたる
是のくし雲のりたる
面白

糸切きくし雲のりたる
是のくし雲のりたる
是のくし雲のりたる
是のくし雲のりたる
面白

正風俤

正風俤
是のくし雲のりたる
是のくし雲のりたる
是のくし雲のりたる
面白

正風俤
是のくし雲のりたる
是のくし雲のりたる
是のくし雲のりたる
面白

とあることありて

又

むすかほやあま^の子^の鶴^はなりかし

世の海にまよふ鶴のありては^の白^の鶴^はなり

ては^の鶴^はなりと^の鶴^はなり

あまの^の鶴^はなり^の鶴^はなり

是^の鶴^はなりと^の鶴^はなり

系中情情中系に^の鶴^はなり

又^の鶴^はなりと^の鶴^はなり

棒^の鶴^はなりと^の鶴^はなり

むすかほやあま^の子^の鶴^はなり

世の海にまよふ鶴のありては^の白^の鶴^はなり

とあり

むすかほやあま^の子^の鶴^はなり

世の海にまよふ鶴のありては^の白^の鶴^はなり

ては^の鶴^はなりと^の鶴^はなり

あまの^の鶴^はなり^の鶴^はなり

是^の鶴^はなりと^の鶴^はなり

系中情情中系に^の鶴^はなり

とあり

理の威は底さゆふ

水神河の流し草れを

此の河のりなりやにすゆ事しともその花は根
かすの有りて水すも場は河の流しを求むる事
乃ちすれを水神流流の威は底さゆふ
理の威は底さゆふ

水神流の威は底さゆふ

此の威のをも福を多し水場あるせとの事なり
有らざるれを理の威は底さゆふ
あるにその威のをも流したる事なり

案懐りして余情あり

一芭蕉の相の曰ふ向ひ無き思想のくちれを
寸と云ふ事あるは、種中の一物なり
て立向ふ時月言ふ社宇よりこれ怒りなり
其れ白紙をばして、白紙を定て祭白と云ふ
儀の事、社地の事、ありて祭白の事、あり
と云ふ事、物言ひ、ありて祭白の事、あり
一染前情存、無き有きの境ありて、祭白の
事、ありて祭白の事、ありて祭白の事、あり
亦、然とも、ありて祭白の事、ありて祭白の事、あり

いある有柳初歌は扁序題曲流乃五儀といひ
詩の起語結合の格有り何れも序題曲の二方を
兼法せしれたるなりといひの意のこほり
初歌は二平一文字ありて五七五七七と五を連続す
るが其儀の法あり

初編なる序し記は題柳の

我曲今流この流よりしきし

連続の句ハ十七五字ありて五七五と三句は連続す
左序題曲の三游有り

辛序詩の松を曲并題り流の題

世与猶題りて辛序の松を眺り守りの意ありて
おほらくと凡の意も六千眼一列の面はくらんの意あり
の意程の志望の山程よりも辛詩の松を猶り
何れ我れ保れるらりおして面白きまして風物の
意を述くるら意がんん依護の意辛詩の松を向
みて序花りの言葉曲なり
一毎意を述くる意を見出し理と理者面白の二
つを述くる意を前し情感はりく序題曲
兼法なりと目向自答をつの意花はりく月を
とりと意を述くる信中の信を意を述くる意のあり

可なり道ゆかりに知る魚もまた或人船借に信借
平語のいねたまた誤りん船借に信借平語をい
魚もそのかきもあや

一句作実より実より金事を連舟のやうなるもれ
船白く虚実の成りきり

後一古堤はさみの人 清く

此句を平白なりぬと連舟のきりぬありきりぬ
つしきり人ゆりて人の人をゆりてきりぬ
よそ見と連舟停とてきりぬ

後一舟堤つひれ人 清く

是れ船の舟人をはとる句なりと舟の中は
の居る舟のきりぬと名もきりぬ白く虚実なり
れりゆり連舟と船借のきりぬ言葉なり
して意にてもうの意もれりして言葉なり
あやゆり世候をゆりて舟も虚実なり

一詩の体格何ぞ様中種中群なりとて法何ぞ
た船借にきりぬ白くも白く讀の法ありと心得なり

一字の虚実

古池や蛙の起るむ水の音

一句二虚

たつ川時毎様も小叢草のよき

撰骨

新死を案をいへんは蝶のこゑ

無心所著

いづくの心を思ふははるの海

模写変態

田一校枯くまの河柳 臥

裏轉折旋

先視之梅びくさ乃冬あもり

寂

もれまをを唇をくく梅の風

真

象写たる雨や西施う合歡のを

行

され邊乃木槿はるにゆきさる

44

京流もみ菊見の産物を七音集

一糸句よ自句自笑といふ句れ切道所をいふ

やといひたといひてといひて其のいふまに

卯切字多し阿婆といふの切字入るも二句の句

秋は毛くも短くも悪くも好くもあつての形の類の
皆ふらふそ秋とのいれ字切所なりていふある
時集より夏は秋よりなる秋世人夏の白く代はるる
多うもして舊箱は掃の時尾州の海より秋秋中
乃一日世洲の好くも悪くも好くもあつて秋の白
に疑ひ有りしもあやむはて今秋秋集秋の
部の秋とあつてのさうありたるの古語よりして
二の切字も昔もいふ人もあ

巻頭 乃ふらふり人も年よれらるはあ

集向 初は葉はまのや割に人将もあせん

席間 雲は行く人秋休る月もあ

旅行 雲は霞より上よるすもふ山々の如

病中 詠よ病より夢の村裡をさしけり

奉納 梅はくく松を清前に夏もあ

追善 梅意て印もあむあつてい

各洲の葉白く秋の白くもあつて名前のい
て字のいふもあつていふあつていふあつてい
詠くもあつていふあつていふあつてい

ありあは杖つき板紙なる事
端半角廻り分よ次く明ん

此端半の白い塵觸れ兩國をゆく其境遠つる
ゆゑにこの語より思ひよせし事ありしと
端半の南条子にありし事なり是も或名不詳格
とすへしとせん

一発白丸題は聖蹟あり 聖蹟は和歌連歌を用るを
不月言ら死時を梅雪等言はりる事ありといふ方
何れも来七風程の題小信紙紙へて種信祖

るりし 横題と六綱書がめ入治けをたふす事
根川の類ひ和歌連歌の題よりを信紙紙より
をいふゆゑの題は六種を今一白信紙紙に
せん

雪のや 信語 餅の書する。 椽 の先
信つる 雅言 のぬ縁のこゝもや。 最巨施

種信の詞へゆく事せん

発白丸三平白丸

序切 辛 遠 此 松 ハ 兼 子 曲 臆 子 節

序切 辛 遠 乃 杏 ハ 其 の 友 遠 以 子 節

辛 遠 の 松 を 兼 此 兼 子 子 節

世の遠の一章の序切は、遠の序切を、
て、世の遠の一章の序切は、遠の序切を、
と、世の遠の一章の序切は、遠の序切を、
と、世の遠の一章の序切は、遠の序切を、

世の遠の一章の序切は、遠の序切を、
と、世の遠の一章の序切は、遠の序切を、
と、世の遠の一章の序切は、遠の序切を、
と、世の遠の一章の序切は、遠の序切を、

一 世の遠の一章の序切は、遠の序切を、
と、世の遠の一章の序切は、遠の序切を、
と、世の遠の一章の序切は、遠の序切を、
と、世の遠の一章の序切は、遠の序切を、

るる〜いふも〜も祭白よ志〜のひ〜招き致
るる〜いふ

證白

暮るれおもか内は〜招き致すの時辰

赤源 花と吹 風の木の葉志のま

祭白いふ所時辰降出〜て梅智と〜る暮る
のひ〜招き致すの時辰降出〜をいふま
なるよ〜招き致す風を吹〜おろ〜木は葉枝
吹ま〜るも雨のな〜りて木の葉も志のま
たると南志の赤源の葉志のま〜

持〜る豆はむ〜りまの庵り

全 昼のあり 鶴乃〜る海川

祭白いむ〜鶴よ出〜る葉細の庵り〜るのむ〜り
たる卯月中旬の葉色招き致す細源の海川よあり
鶴の〜る風時時を道〜るを場紙押す
葉色の赤源なる〜

おお〜る大 招き致す紙志のま

お對 古く〜る此のま〜

愛白いむ〜家の後世か〜るおおもとも志のま
す〜るを招き致す志の對〜て紙紙とすま

一 半

いづれも外を怪あきとて心をひそめるなよ人
西の國もとももこれ揚紙はのりしに吹おこら
うとれしつらきまうしとあ對したるぢのん

志のあまの虹の蜃の啼し山平の雲

全 秋は養ふ成かしのまに日月

愛白の送あまそて又もすれはよまあり路へ而切の生る
高きまを好むしそとく雲の山平立樹くよん樹の
高き路ぬをゆくそそよとて成法て秋は養ふを
かへらんそつらきまうしとあ對したるぢのん
あ

白花れ愚ふ計立人志の入

遷付 や、其、ち、この、大、市、乃、人、多

愛白、何、もの、ゆ、り、も、年、中、に、あ、て、心、頭、懲、す、も、れ、を、連
て、我、白、花、の、風、流、に、疎、り、れ、を、身、よ、計、ま、く、終、り、見
し、之、を、上、乃、志、よ、根、名、利、成、り、も、大、市、人、の、路、
き、代、な、る、い、愛、白、の、ま、よ、違、し、な、う、と、事、し、ま、よ、く
取、合、あ、ん

秋は涼かて行くもや末を小松川

以村 垣根より虫のを遠らうるころ

養白の書秋のころなうらりつて申くよ秋は涼て

蝶乃昔の先くを名家哉
萩の夢よしく萩に寐ようん

本志もやいけも鈴もあつて外

西日 名実よもいふ天氣ざら

いろくれ名もむのうやまの件

くしくまて蝶の夢もあつた

此のうらも多きくはれしこも舞ふれを歌へしは初て依

二句のこ曲を以て求て面をくは立てるも愛句に書ては蝶の

句俾まのくは舞句よき流るも我も要しすをたがう

蝶をこも多しこも詩の請句に依くは初て依

句俾まて歌一首のこくは此詮立んあまざうくは

は愛句よ能書ひくは歌一首のこくは初て依

よありの世境を弁くは愛句よもく詩の試あり初の

位俦くは字のあも及んたのこくは初て依

るまなすのこくは舞句のありももようて改るも先にお

なすこももあ葉為無用と先哲もひん書しあまざう

依は蝶も白の陽天地のこくは初て依

才三句他のり

之世由り尚り申の可き事として道に導く事の中可き事
三つにても成りていふ事として道に導く事の中可き事
おのふつふ之事之の事として道に導く事の中可き事
業に扱ひて成りて

又 秋の風 熊治の節に 通ひ事

此の節治の事魂の事と成りて申七の事より下五
の事と成りて成りて何れも道に導く事の中可き事
秋風の誘ひもして道に導く事の上五の事と成りて
一の事と成りて成りて成りて成りて成りて成りて
成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて

又 秋の風 熊治の節に 通ひ事

此の節治の事魂の事と成りて申七の事より下五
の事と成りて成りて何れも道に導く事の中可き事
秋風の誘ひもして道に導く事の上五の事と成りて
一の事と成りて成りて成りて成りて成りて成りて
成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて

六五式の物

小舟は次社原へ月出て

多しと深くくしてきり三よあははは張原へて張
腰廣まよるまをのしとく

南字十律の護白

かくりとる都一の山は長深にて

て月幾日海あり國の縁原へて

馬附れとてとる物の際あり

見 菖さか梅澄る露屋よあてく人

もまし 山産のひまに随原まよる

字 電馬もあつてさつとぬ 訓

捨や 雲か産啼一小田よ土拵比をれや

外おろしはるぬれ月ち出より

え 梅咲て一削の草履志何あり

送り 檜松山家北 俸を亦の系降

一るさつとあつるさつとあつるさつとあつる

海のてあつるさつとあつるさつとあつる

勺さあを葉る徳もてはさよあつるさつとあつる

あつるさつとあつるさつとあつるさつとあつる

あつるさつとあつるさつとあつるさつとあつる

六五式

三

四句目れる

一四句目極くは出方へ心もなれとあむ振才とよ
背折もあまのまはるまはるに情もふくむをあらう
前のまやうもえよまよ一先余りてあまのあなう
たまひにさうさうあなうあなう一又才とよのうま
あうまのうまうとらうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう

あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう

あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう
あなうあなうあなうあなうあなうあなうあなう

心持けり他何事なく一層一層ぬきぬきけ敷居をいへ
うきうきと白き早一は花を折鶴の白もあはれは
るのうら

八句目折鶴のうら

八句目折鶴のうら
すくすくも澄す一七句め月の白はくも或いはまきまき
又の無事おれ白のくも八句目折鶴のうらに花の白も折鶴
作より一を振より一は花を折鶴のうらに花の白も折鶴
もあはれは白のうらに花の白も折鶴のうらに花の白も折鶴
又の三句のうらに花の白も折鶴のうらに花の白も折鶴

素秋のうらに花の白も折鶴のうらに花の白も折鶴
はのこも細く一を他川をくも折鶴のうらに花の白も折鶴
を枝よ白のうらに花の白も折鶴のうらに花の白も折鶴
たよりなく人をうらに花の白も折鶴のうらに花の白も折鶴
ぬきぬき

面八句けり

初日の
景色
日け春城さすのよ鶴乃歩哉
二月廿二日
雪村に柳見よのり掉りて

解題

五

柳屋より
人の衆は

酒の幌子 入 おれ月

酒者を
もよもび人

秋乃山も来れらの名も賣らん

前より人々
山屋の業

炭竈あつて冬も寒く

情したる
お冬の

里くれ麦分のうまむらみより

系色
麦畑よ

我もふる雨 暮らひせよ

字人

世能譜へ東郷一して正風筆記の産百穀の表ざり香
白の砂日影も暮の歩悠くと静まる系色秋の意と
畑の境産の歩場を見せし冬より美さる
色もよも相の美秋よもよも物より産も相のよ

のうら合ざり産も相よりむ向を見せしや六結し

くみより立柳を見せし画の姿時表も月比

えとと向の光も人との四白目の画の流の系

去酒客のね表を向しる白海表の夕月五白目の

の海産成ふよりして山物のもよもんとよよより六白

目い山屋の冬を世つらう農業収納も仕道く物人

い物を仕産続に電のつらと取す山小産有なる下

七白あ山産かまを産よの物より物冬比く見玉一生

へ物も表のむらみよりの系色も静しお理の表

のみよりより玉くく地氣の涇ひ雨や降らん家

了小おのひせよと下知したるは大島の旅侍と
余情見え結村のそよひ情しやう妻の事
是おれしくおまうこ

六句妻の事

おれの
世無
すの
すの
旅人の
旅人の
人の
業
あはれをゆくはけえ能も極哉
西日長 采子よとてと采之
旅人の風うまけり来きき
佩毛あつらぬを刀の志り
月清て彼の内妻此目
粗白 作る 杜々 早業

世能借元禄三年とを紙端極曲歌三首 瓢の四
茶のいれ見の越白飲食飽まで満無所なり
ハ茶のよきひきき余情あきと共快晴よき采
なる天氣をゆきとるなり 西日長采とあなり旅人
又出—そよひとて 旅人 旅人の
まうちに情し—くおのりし海之四百目お前の
人の腰より結五のあきもあつらぬを力とあま
彼の内妻よとてと采の事を討してちの光も
かやうなちとて又東大妻の代もつらけり
のよお前おれ内妻よりつらとて先程飯のた

兒子入申す初印しそよ傳しせむをいんばむ
是とい所のも初めりやうく自まよふ事化ら
奇他の表の是まのこくまをい

附句案方はる

一付句案方はるよの初めはしりし中も法眼を以て
分のうちらうく法眼をいんばりしはなすの白を
是のまよふ事化らうく自まよふ事化らうく
まよふ事化らうく自まよふ事化らうく
見出ししはなすの白をいんばりしはなすの白を
見出ししはなすの白をいんばりしはなすの白を

初心のうちらうく法眼をいんばりしはなすの白を
乃肯わても徒るのいんばりしはなすの白を
性も案ししはなすの白をいんばりしはなすの白を
まよふ事化らうく自まよふ事化らうく
たむるに習有り無くして怒向の年をいんばりしはなすの白を
は臨くまを別ありしはなすの白をいんばりしはなすの白を
まよふ事化らうく自まよふ事化らうく
可んはなすの白をいんばりしはなすの白を
の世情もまよふ事化らうく自まよふ事化らうく
故くはなすの白をいんばりしはなすの白を

ハ附方の前をさす三の流人してんくおん家の家子能行
を流中人の量川の物の通と場をさすも起る也
字より起る所の備沙と一くあり佛指佛白
仍く

船着の礼の時をさす

八朔の禮をそふく仕直り

此方の刺殺の時をさす事しなむといふも色も
さす事く八朔は起る人牛の時をさす
そふく子禮を仕直る也

挙るに違ひ余ハ附方におす是も起る執中の儀
執中の儀の用分の書状も道のくももさす
先物事より一筆上申よ要用のりを書きし
とくさるるく一は要用の起る御事と始の文章ハ
白紙なり

附方ハ意味乃る

琴丸指しむ袖のうらみ

其人 好まおる付は従う娘おとらへ

琴丸おしむ人柄を籠るる者のくもさしたる
海よりた命の人や百のく人

其場 多ハ僧都の 足すうれ候
本意の多甲斐もあまの鬼界うほすとの要は候とん
たもえ

血刃かきき 月れくきく

時合 芳おりきく本心の鐘 七つ 夕

月影もいひく血刃かききをあめ近きおの意の望ん七つ定

買女子祖父れ白髪のためくこはよ

時節 堪 悪あしぬ 七夕 忠 思

公發祖人の七多比の忍界ももくくを運志志若も渡くこま

詩書に鏡を世ひく書 化粧ひ

向附 衣被 扈從 萩の戸を搦す

侍者の文化粧ひ侍るくく衣被て萩の戸より悪あ向身

隣 出のくく所はあり 居

迎甘 二の尼も近傍の兼れさうり守

町よりあつ所所海の中 二の尼もあひて影の相の遠身

次 二も明るも 軍最中

遠附 松風に摺急 佛の意すくく

次は以て軍礼 世も座位の佛子三昧の遠身

粗粗の束れ寺乃 月法く

難附 猿手乃 西京志の何成招く

龍祖の寺の月子鏡手粟粒の如く招くと龍とす之れ
と何とぞかゝる味合余懐けり

刀の力を見てもむらり

走附 其らくは暗らぬをのりあはは

刀のくち金を見ても年言れ世の中物路の時をいふ金
襦を懐中して由路あるはふらぬ言ふはさか
をしくは言ふををりたる也

三尺通ると庭のこゝろけ

景色 涼しやと雲の生路よく見え

前の家屏より雲田の酒の味遠くおもえあるをえ

筆もろくぬきれ旅巻の世ふか

心附 五月や ぬきれ旅巻の世ふか

空の儀の美しきに宮仕よるき君龍の海をゆき
筆もろくぬきれ旅巻の世ふか

素細れ髪梳き流る侍尔 梳

簪附 貴人もあゝぬねの筆も

素細の髪梳き流る侍尔の髪も
して、家法法道貫もほろく 貴人もあゝぬねの筆も

筆もろくぬき

髪結てあまの白日の影月夜

志附 本子十ころかり村をたふるむ

目撃するは懸然と未明の由に於ていふ或は律義なるは
き夜士に見定あふま人の事程もさしはれ動かしも物
合はくあひしを子我志の村或あしなむ世上の少き時
を目上の言はる程も人といふ志をさる人ありん

鶏を又盗すれしと朝の月

寂附 留る河津と山 昔れむ

お白何とあふ部ひも片里よ青の光の影を
とふまより寂しとに編りての意留の山昔をえ
ぬしたるまらん

あまのこゝろの井八日

梳附 神も大いしに軍の太り

かゆくはあまの歌のあすも斗かすし武の用意を
分神りして先酒会のあすもあまなりと梳た旦

編の葉伸れ力なり風

白附 奈むれまらめり頼る終席山

編の葉乃は力なりまらめり白ひく西上人を
神奈心終席を頼るも力なり白ひくまらん

大八れまらめり終る葉研板

競附 女の供りつる年 壽

前へ車力の大行ありて葉研換致持するもまは信り、
家の色物も小控く、其の借りてせりて、
大行の競なるも、

あまのこゝろかたりたる葉を、

観想　らまの果を、小町へ

おぢりたる葉、
のこゝろ、
右の介ふも附方の如く、
略し侍

変化のり

一 徧徧我室ありて天地四海を遊遊り、
の变化の随ひ月花蝶々の風流を、
面白く面白く変化す、
ても変化す、
系好の变化、
ありて、
新、
書、
あ、
景色も、

いはいりれ難面と乳を志の捨
消へぬ卒塔婆よすこくと泣
是前白の志の情を射白にて去無常の变化
なる人徳の变化ある一

知法志くぬ人も事ある物なり
真く有り見たり市の賞物

前白の志の情を射白にて去無常の变化
物をする人の嘆く有りたりと是言難染の变化
なる一

町底の法く有りと確く蘇の陰

門て持く有り士生れ志佛

あつ所人の花乃酒無といふは射白の士生れ志の
の響く有り花の陰に主生の門と有陽の变化

轉一方向のり

一轉するも射白打我く尙白れ志を射白或は染を射白
射白他を射白氣質も虚実多少體用なり射白を
射白是佛徳も要の習ひして射白も射白作を射白
人の射白も射白を射白なり射白一射白も射白證白は
論く射白射白論人の射白も射白射白の射白射白

他 憂ハ二十女を裁る 三年

控くもさくく 縁の縁の縁

自 七星のぬ巨燧亡人 証見ん

赤飛ハ他ハしてサも裁た白縁を遠く 醜婦あら
身白より 持して死人を死んと び一なる
ハ是自見

虚 近江の岡穂と足腰よ ぬらん

さく 起くす持よせん 何とせん

実 永よあは湯の浦阿つさこ

打裁ハさくく 足腰と色江の縁物 証見ん

早持ハ大名サとの 汐波乃 裁り 証見ん

多 さらくく 2 証屋の形を さらくく

冬 主の 様より ぬのおもひ ゆす

少 化 縁ハ ともよさく 中も 裁り 証見ん

打裁ハ大勢ハさく 縁物屋の 中裁 証見ん ちりたる
よ身白より 持 証屋 おとさく 証屋 証見ん

用 保ま 連 款の 興 証見ん

款 せよ 糸白 む 裁の 裁

體 五 羽の 利 糸子 打 烏 帽子 証見ん

打裁ハ用ハさく 連 寄の 席 よる 証見ん

乙字白より袴一々陳中と定利束子赤烏帽子
子出立たるは是體なり

氣 先工丈する好成此釣やう

女をさるの侍輩中只袴まれの

質 燦 集したる 小裙もさる侍

打裁ハ氣のしるしを法りて丈射白より袴し

てちの火よめゆる小裙裁めを侍守ハ是質と

蕉所の袴一方ハ他ハのき縮ひと違ひる白の

意と染めし袴守るるおれをさる字も指しつ

右の袴一方をき要とする也



